

巻 頭 言

昨年度に世界中を席卷した新型コロナウイルス（COVID-19）の流行は、今年度もなおその勢いを止めることなく、私達の社会と生活に、そして家庭・学校をはじめとする教育のありかたに多大な影響を及ぼし続けている。これをひとつの奇貨として ICT 化や学校の働き方改革が推進されている一方、格差・貧困など子どもの生存と成長のための基盤そのものをめぐり問題状況への対応が、いっそう強く求められている。

このような中でさらに世界では、戦後以来築かれ、冷戦体制終焉後にも受け継がれてきた国際関係を、暴力によって改変しようとする試みが生起している。国際秩序が一部の国家群にとって既得権益の維持を意味するという E.H.カーの言葉にあるように、グローバリズムに基づく国際関係が国家間格差の固定化などの不正を内包しかねないことを無視してはならないとしても、それゆえにまた、国際社会にも身近な生活・学校にも存在する暴力性に対して、私達が主体的に認識し、自らの問題として応答しようとするのが、平和という絶えざるプロセスを推し進めることになるのだろう。

教育がまさしくこのプロセスを支える協同的な営為であることは、例えばコメニウス、そしてもちろんペスタロッチの名を挙げるとき、私達に共有されているはずである。これからの時代を生き、形作っていく次世代の学びを支援しつつ、私達自身もまた学び、学び合い、そのための手立てを改善していく。このように学習開発のための学がますます重要となる今日にあって、あたかも社会変化の速度に應えるかのごとく装いながら自己目的化した「改革」に空転することなく、確固とした学知の歩みを共有する場としての責を担っていくことを、「学習開発学研究」の使命としてあらためて自覚するものである。

本研究紀要の発展のため、皆様のご意見ご批判を賜れば幸いである。

「学習開発学研究」第 14 号

編集委員長 山内規嗣